

令和6年度 研修講座「点訳の基本」2 分かち書き

北海道札幌視覚支援学校附属理療研修センター

花尻 真由美

1 はじめに

一般に、漢字仮名交じり文では分かち書きを行わず、漢字と仮名の使い分けで文を構成している。仮名文字体系の点字では、一定のルールに従って分かち書きを行わないと読みにくいばかりでなく、正確に意味も伝わらない。

【例1】 かれにはきょうようがある。

- ・彼には今日用がある→かれには■きょー、■よーが■ある。
- ・彼には教養がある→かれには■きょーよーが■ある。

【例2】 あするすばんにこい。

- ・明日留守番にこい。→あす■るすばんに■こい。
- ・明日留守晩にこい。→あす■るす■ばんに■こい。

【例3】 おしょくじけん

- ・汚職事件→おしょく■じけん
- ・お食事券→おしょくじけん

日本語の文の単位は、自立語または自立語に助詞や助動詞を添えたものから成っている。点字はこの『文節』と呼ばれている文の単位によって分かち書きを行う。

自立語の中の長い複合語や固有名詞は、『意味のまとまり』と『拍数』を判断の基準として分かち書きを行う。これを文節分かち書きと区別して『切れ続き』という。

今回の研修では文節分かち書きを取り上げ、基本的な自立語と付属語のルールと、間違えやすい分かち書きとして「形式名詞」、「補助動詞」、「こ、そ、あ、ど」を中心に説明する。

2 文節分かち書き

点字は、文節分かち書きを行うことを基本とする。

人に話すような感じで「ね」や「さ」を挿入して不自然ではない場所が『文節（分の単位）』であり、そこで区切って書く。

【例】

私は旅行をしたい。→私は（ね）旅行を（ね）したい。→
わたしは■りょこーを■したい。

1. 自立語と付属語

文節は自立語と付属語から成っており、それぞれ次のような性質を持つ。

ア. 自立語：それだけで1つのまとまった意味を持ち、単独でも文節を作る。(名詞、代名詞、連体詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞、感動詞、形容動詞)

イ. 付属語：それだけで1文節を作ることとはできず、かならず自立語の後ろに付く。(助詞、助動詞)

(ア) 主な助詞：か が から くらい けれど こそ さ さえ しか すら だけに たり つつ て で とも ながら など なり に ね の(ん) ので のに のみ は ばかり ほど まで も や よ より を

(イ) 主な助動詞：ごとし させる ず せる そうだ だ たい たがる たり です なりぬ(ん) べし まい ます みたいだ よう ようだ らしい られる れる

2. 基本ルール

自立語は前を区切って書き、付属語は前の語に続けて書く。

【例】

キリンは首の長い動物です。→キリンは■首の■長い■動物です。

※「キリン、首、長い、動物」が自立語、「は、の、です」が付属語。

【演習1】 次の分の分かち書きする箇所に印をつけてみよう。

ア. ゆっくり歩く。

イ. 点字を書く。

ウ. 寝てばかりいる。

エ. 歩きながら手を振る。

オ. 美しい湖を背景に写真を写した。

カ. かわいい天使のように見えたけれども、実は恐ろしい狼であった。

3. 注意すべき分かち書き

(1) 形式名詞

形式名詞(実質的な意味が薄れた名詞)も自立語なので前を区切って書く。

主な形式名詞：上(うえ) 内(うち) 限り(かぎり) 事(こと) 末(すえ) せい 節(せつ) 程(ほど) ため 点(てん) 通り(とおり) 時(とき) 所(ところ) 方(ほう) 外(ほか) まま 眼(め) もの 故(ゆえ) 由(よし) 分け(わけ) 頃(ころ) 際(さい)

【例】

・東京あたり→とーきょー あたり

・悲しみのあまり→かなしみの■あまり

・力の限り→ちからの■かぎり

・忘れずに読む事→わすれずに■よむ■こと

- ・私が生まれた頃→わたしが■うまれた■ころ
- ・帰国の際は→きこくの■さいは
- ・遅れたため→おくれた■ため
- ・見る時→みる■とき
- ・家に帰った所→いえに■かえた■ところ
- ・ご理解の程→ごりかいの■ほど
- ・思ったまま→おもった■まま

※「あたり、あまり、程」が熟語や助詞として用いられる場合は前に続けて書く。

【例】

一人あたり、10日あまり、3時間程、後程、憎らしい程

【演習2】 次の文の分かち書きする箇所に印をつけてみよう。

- あ. 面白い事を言う。
- イ. 風邪を引いたため休んだ。
- ウ. 真偽の程を確かめる。
- エ. 先程は大変失礼いたしました。
- オ. 自炊をするために買った炊飯器が、1ヶ月あまり経った今も箱の中に入ったままだ。

(2) 補助動詞

他の語に付いて補助的な役割で使われる動詞をいう。本来の意味が薄れて付属語的に用いられる補助動詞も自立語なので前を区切って書く。主な補助動詞を下記に記す。

ア. 「～て、～で」の後ろに続く（ある、いる、みる、おく、行く、来る、やる、くれる、しまう、あげる、もらうなど）

【例】

- ・本である→ほんで■ある
- ・動いている→うごいて■いる
- ・行ってみる→いって■みる
- ・考えておく→かんがえて■おく
- ・出て行く→でて■いく
- ・走ってくる→はしって■くる
- ・買ってやる→かって■やる
- ・変わってくれる→かわって■くれる
- ・知らせてあげる→しらせて■あげる
- ・直してもらう→なおして■もらう

イ. 「～に」の後ろに続く（なる、おける、つく、よる、とる、おくなど）

【例】

- ・お出かけになる→おでかけに■なる
- ・世界における→せかいに■おける
- ・問題について→もんだいに■ついて
- ・これにより→これに■より
- ・私にとって→わたしに■にとって

ウ. 丁寧な言い方（いただく、ください、いたします、いらっしやい、ございます、申し上げるなど）

【例】

- ・お送りいただく→おおくり■いただく
- ・お休みください→おやすみ■ください
- ・失礼いたします→しつれい■いたします
- ・みていらっしやい→みて■いらっしやい
- ・ありがとうございます→ありがとう■ございます
- ・ご挨拶申し上げます→ごあいさつ■もーしあげる

3. 「こ、そ、あ、ど」など

副詞の「こう、そう、ああ、どう」や連体詞の「この、その、あの、どの、ある、わが」なども自立語なので、いずれも後ろの自立語との間は区切って書く。

【例】

- ・こう考える→こー■かんがえる
- ・そうしてください→そー■して■ください
- ・ああすれば→ああ■すれば
- ・どうしようもなく→どー■しよーも■なく

※ただし、後ろの語と結びついて一語になっている場合は続けて書く。

【例】

そうして（「そして」の意）、どうして（なぜの意）、この間（先日の意）、その上（さらに
の意）、そのうち（やがての意）、その後、この程、この度、そのくせ、
そのまま、その節、どのみち、我が家、わがまま

【演習3】 次の文の分かち書きする箇所に印をつけてみよう。

ア. 私の母は、編み物が得意で、その上料理も上手です。

イ. どうしても彼に会いたいの、どうして彼は私と会ってくれないのかしら。

ウ. その節はいろいろお世話になりました。

エ. そのうち、あなたのお宅へ伺うつもりです。

オ. 図書館で働いている人は10人で、その内二人は女性です。

4. 「ない」の書き方

ア. 動詞の後に続く「ない」が「ぬ」「ず」に置き換えられるときは前に続ける。

【例】

起きない 歩かない 食べない

イ. 「～ない」を「～はない」と書き換えられる場合は前を区切る。

【例】

- ・関係ない→かんけい■ない
- ・問題なかった→もんだい■なかった

ウ. 「～ない・なく・なし」などが前の語と複合して、一語になっている場合は続けて書く。

【例】

あどけない 情けない 何気ない

【演習4】 次の文の分かち書きする箇所に印をつけてみよう。

ア. 宛先に間違いなく届くためには、住所を間違えないことが大切です。

イ. なんとなく元気なさそうな様子だったので、さりげなく声をかけてみた。

ウ. 地図を持ってなかったので道に迷い、とんでもない方向へ行ってしまった。

エ. 相手が地元では敵無しの強豪とはいえ、ふがいない結果に終わって申し訳ない。